
英雄ストーリー

冬空 白雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄ストーリー

【Nコード】

N9164X

【作者名】

冬空 白雪

【あらすじ】

世界は異能者と通常者に別れていた 異能専門の中でも特殊な学校に通う月葉燐音は、ある日、買い物物の帰り道に少女と衝突する。少女は帰る場所がないと叫びだして、燐音は家に連れて帰る。彼は、忘れようとした悪夢を思い出してしまふ。そして、ある事件が切っ掛けで気持ちが動き出す。これは英雄になる前のストーリー。

第1話 ケンカは痛い(前書き)

前に載せていたものを少し変えて、また載せました。

第1話 ケンカは痛い

寝癖で髪がピンと外側に跳ねている男は、朝食に食パンと目玉焼きを食べながら、液晶型テレビでニュース番組を観ていた。それは朝のすつきりとした気持ち汚す。テレビから胸糞悪いニュースを読むアナウンサーの声が耳に伝わってきた。

『昨夜、一人の男性の遺体が発見されました。男性は黒焦げになっており、身元の究明を急いでいます。自殺と殺人の両方で捜査をしていくとのこと。続いては芸能ニュースです』

「朝から嫌な気分だ……」

低脂肪牛乳を飲みほして立ち上がり、リモコンでテレビの電源を消す。寝癖を直すために洗面台に向かい、水で髪を濡らしてタオルで拭き、最後はドライヤーで乾かす。寝癖を直してからハンガーに掛けていた制服を手にとって着る。準備を終えて、靴を履いて玄関の扉を開けて家を出る。

微風が髪を揺らす。鍵を閉めて学校に向かった。

男が住んでいる所は実家ではなく、学校の寮だ。実家からだ学校に通うのに自転車でも時間も掛る。実家の近くにも学校はあるのだが、男、月葉燐音は異能者のため通常者が通っている普通の学校には通えない。

世界は、異能者と通常者に別れていた。

異能者は、ここ何十年で急に生まれ出した。原因は何なのか未だに解明されていない。一説によると、異能の研究していた組織が事故で破壊し、それが何らかの影響を及ぼしている。とか、隕石が落ちてきた時に、何かしらの成分と一緒に飛来してきた。など、説は噂の数だけある。

異能者は通常者と比べ物にならないくらい強い力を持っている。制御ができず力を暴走させないように、犯罪に力を使わせないために、小さい頃から道徳や力の訓練が義務付けられている。普通の訓

練校は異能者が力を制御できるように教えるだけで、あとは普通の学校と変わらない。もちろん先生も生徒も異能者で構成されている。しかし憐音が通っている所は特殊な学校で、育てる訓練学校だ。異能者が罪を犯した時に対処する『護者』になるための訓練学校。ここを卒業しても護者でない道もある。力をうまく使い、仕事に役立たせる者もいる。

異能者が罪を犯す時がある。その時は通常の警察では相手にならない。異能者には異能者をぶつけなければならない。そこで護者が必要になる。

異能者が生まれたことで国が危険と判断し、すぐに罪を犯した異能者を取り締まる対異能者組織が創られた。それが、護者だ。

護者の使命は、

- 1、 異能を使用して人を殺してしまった者、犯罪を行った者を捕まえる。
 - 2、 異能者が拉致された場合、解決に向けて動く。
 - 3、 力が暴走した者を抑える。
- といった業務がある。

「おい、憐音待ってくれ！俺も一緒に行くからさ」

アスファルトの歩道を歩いていると後ろから憐音を呼ぶ声がハッキリと聞こえてきた。その声を憐音はよく知っていた。同じ寮に住んでいる憐音の友達、夏海夜涼介だ。

足を止めて振り返ると、数十メートル先に黒い制服に身を纏った京介が腰に二本の剣を携えて、息を切らせながら走ってきていた。

「はあはあ、マジで疲れた。こいつ重すぎなんだよ」

剣に手で触れて憐音に見せてくる。

京介ももちろん異能者だ。物体を操ることができる能力を有している。生物は操れないが、物なら大概操る。例えば、この剣を手に持たずに動かすことができる。ちなみに憐音は風を創りだす能力だ。

空気がある所なら風を起こすことができ、竜巻なども簡単に創りだせる。

「一本ならまだしも二本も持ってるんだから、そらそうだろ。それに学校に余裕で間に合うんだ、歩いてこればいいだろ」

「そんなこと言うなよ。友達なんだし、仲良く一緒に行こうぜ」

京介はへらへら笑いながら言う。京介は燐音の左側の位置についた。

夏の暑い中、男二人一緒に歩き出す。

歩いていると男子ならしたことがあるであろう、自然に芸能人誰が可愛いかという話になっていた。

「俺は、薬心奈ちゃん可愛いと思ってる。おっぱい大きいし、お尻も小さい、スタイル最高だ。それにあの顔だけ」

京介はゼスチャーをしながら興奮して言った。

「何言ってるんだ！？ 千草泉のほうが可愛いに決まってるだろ。キラキラ輝いているパッチリ二重は最高だぞ。お前、かわいそうな奴だな」

燐音は京介と意見が合わず、イラっときていた。

「ああ！？ 燐音のセンスこそ大丈夫か？」

「正常だよ！ 京介のセンスこそ疑うわ！！」

どちらも譲らない。

燐音は、自分が可愛いと思っている芸能人が一番可愛いと絶対的に信じているからだそして京介もそれは同じだ。

こうして、朝から醜い争いを繰り返しながら学校に向かった。が、学校に着いてもまだそれは終わっていなかった。二人は校門で言い争っている。

「薬心奈は性格悪いだろ。何であんな奴が好きになれんだよ」

「はあ！？ 千草泉なんて絶対ビッチだろ。清純派で売ってるつもりだろうが、体から滲み出てんだよ」

「なんだと！」燐音が睨む。

「なんだよ！」京介が睨み返す。

両者とも我慢の限界が来ていた。最初はただの世間話だったはずが、いつしかケンカに発展していた。

「いい加減に認めろよ……京介！」

「燐音こそ……今なら許してやるぞ」

お互いに服を掴み合った。今にも殴り合いになりそうな雰囲気をしている。

そこに、一人の女子が現れた。どこまでも吸い込まれそうな黒色の瞳をした、茶髪のロングヘアの彼女はビーフジャーキーを啜えながら二人に歩み寄っていく。

「こちららにやにしてんの？ 朝から暑苦しいにもほどがあるよ。周り見てみな、引いてる」

他の生徒は二人のケンカに引いていた。だが、そんなことはお構い無しだった、声を掛けられた二人は同時に言った。

「ああ！？ 関係ねえよ。俺達は負けられない戦いをしてるんだ。外野は黙ってる！」

「恵玲奈には関係ない話だ。引っ込んでろ！」

二人は興奮していて口調が強いが、それを気にせず薪山恵玲奈は二人に訊いた。

「負けられない戦いって……。何が原因でケンカしてんのよ？」

理由を訊かれた二人は、どっちが悪いか決めてもらおうと思って原因を話した。

「芸能人で誰が可愛いかって話になって、俺が好きな薬心奈ちゃんを燐音がバカにするんだよ。信じられないだろ？」

「京介のセンス最悪だろ？ 千草泉ちゃんのほうが可愛いのに薬心奈のほうが可愛いとかほざいてるんだぜ」

あまりにもふざけたことを言っているので、恵玲奈は理解するのに少し時間がかかった。二人とも真剣な顔でケンカしていたので何事かと思ってみれば、どうでもいいことこの上ないことでケンカをしていることが解った。

「なにそれ、呆れるんですけど……。結論はどっちでもいいしって

話ですよ。ただ、みんなに迷惑だから、ケンカはやめなよ。ね？」

恵玲奈のどうでもいいという言葉聞いて二人は切れた。

「はっ、所詮ビーフジャーキーを食べてる女なんかには、これがどんなに大事なことが解らないんだな。時間の無駄だったただけだな」

「そうだな、京介。こいつには解らないんだよ。ビーフジャーキーなんかを食べてる女だからな」

二人の言葉を聞いて恵玲奈は黙っていられなかった。

「ねえ、今何て言った？ 二人ともビーフジャーキーをバカにしたでしょ。今、ビーフジャーキーをバカにしたでしょ！！」

ケンカを止めさせようとしていた薪山恵玲奈は、ビーフジャーキーをバカにされて怒り心頭。実は彼女の好きな食べ物はビーフジャーキーなのだ。好きなモノもバカにされることは人間にとって屈辱を受けたのも同然のことだ。

「だからなんだよ。引っ込んでろ」

「こっちは忙しいんだ」

「ビーフジャーキーをバカにされて引っ込めるわけないでしょ！

あんた達謝ってよ！」

人差し指を二人に指す。二人は彼女の人差し指を掴み、二人同時に言った。

「謝るわけがないだろ！」

「誰が謝るか！」

「そうなの……なら、力づくでも謝ってもらってから覚悟しなさいよね！」

三人とも血管が浮き出ている。恵玲奈はケンカを止めることなどどうでも良くなってしまった。頭には謝らせることだけだ。

「話が早いな。これで負けた者が勝った者に謝るんだな」

燐音は不敵に笑っている。

校門付近から移動して運動場にやってきた。ここは広くて、力を使っても迷惑にはならない。三人は離れて三角形の形になり、体勢を整える。燐音は屈伸をし、京介は上半身を捻って、恵玲奈は腕を

上に伸ばしている。

「燐音！ お前を斬る！」

「京介！ 吹っ飛ばしてやるよ！」

燐音と京介が向かい合う。

「なに無視してくれちゃってるのよ！ 今、謝るんだっいたら二人とも火傷程度で済ませてあげるわよ」

一人無視されている恵玲奈。

風が吹いてどこかにある缶が転がった音を合図に戦いは始まった。京介が左手を横から前に突き出して動かすと、京介の後ろから鉄のパイプが燐音を目掛けて飛んでいった。反応が遅れて風で防ごうにも時間が足りず、ギリギリしゃがんで燐音は避けた。そのモーシヨンの間にも剣を片手で持って京介は燐音に向かって駆け出している。燐音は体制を立て直し、風の刃で京介を斬りつける。

「三日月」

しかし、風の刃は京介に届く前に京介の能力で操った誰かの自転車で防がれ弾かれた。

「クソ」

京介は、燐音を斬りかかった。燐音は後ろに跳び引いたが、それでも剣は左腕をかすった程度に切り裂いた。剣先が赤く輝く。

「痛っ」

斬られた燐音はすかさず京介の懐に入り、右手を腹に当てて風を生みだし回転させ、吹き飛ばす。

「ぐああああ」

京介は吹き飛び、地面に叩きつけられた。

追撃しようとした燐音は炎の壁に阻まれてしまい、動きを止められた。

恵玲奈の仕業だ。空気がある所なら炎を生みだせ、操る力。

「私を……無視するな。火傷じゃ済ませないんだからね。炎雨！」

赤い雨が放たれる。いくつもの炎が上からではなく、水平から避けることができないほどの数が迫りくる。が、燐音には関係なかつ

た。

「風車」

手を突き出し生み出された風で炎雨を上空に吹き飛ばす。炎の粒は上空の空気に冷やされ、消える。直後に、遠くから京介の声が聞こえてきた。

「お返しだ！ 喰らいやがれ」

車が走ってくるようなスピードで今度は車を飛ばしてきた。

「くそ、避けられない」

炎雨を吹き飛ばした直後だったため、風を生みだして防ぐことも出来ず、避け切れることもできず、そのまま燐音は車に轢かれるように校舎の壁まで吹っ飛ばされた。どうにか手をバツに重ねて重傷は避けたが、手と背中激痛が走る。どうやら片方の手には骨にひびが入ってしまったようだ。

「京介も覚悟しなさいよ。炎龍喰らいなさい」

手から放たれた炎は龍の形をして襲いかかる。京介は避けようとはせずに、燐音に飛ばした車を引きよせて盾にする、と同時にもう一つカーブミラーをエレナにぶつける。車は爆発し、重症は避けることができた。しかし、飛び火が制服に燃え移ってしまった。

「熱ちい、燃える、燃える。水……水ないじゃん。やべえ、消えろ、消えろ」

近くに水がないため、手で火を消そうとする。それでもいけないので京介は寝転がりコロコロ回って火を消している。

恵玲奈は炎龍を出して体力が持たなかったのか、避けることができず、カーブミラーは直撃した。

「きゃあ、痛っ。額に傷つくじゃない」

三人共それぞれが傷を負っている。

「痛えな。車に轢かれたようなもんだぞ。覚悟はできてるんだろうな」

「熱いだろ！ やっと消せたぞ。覚悟しとけよ」

「額に切り傷できたらどうしてくれるのよ。覚悟しなさい、あんた

達」

それぞれ力を溜めて技を出そうとしている。が、それを何者かに阻止された。植物の枝が身体を締め付けられて動くことができない。「な、なんだこれ？ ……動けない」

「きゃあ、なによこれ」

「邪魔すんな。今、いいとこなんだよ……動け」

動こうとすると余計に締め付けられる。

「何がじゃないぞ、お前達！ 生徒同士で異能の力を使ってケンカするのは禁止にされているはずだ！ それに、もう授業時間だぞ！ いい加減にしろ！」

ケンカの邪魔をしたのは学校の先生で三人のクラス担任だった。

植林守雅先生、植物の力を使う異能者だ。手を地面につけて植物を生みだすことができ、操る力。

三人は頭を下げることができないので目を真っ直ぐ見て気持ちを込めて謝る。

「よし、お前達は医療班に診てもらって身体を治してこい。治ったら、ここの運動場を綺麗に掃除しろ！ いいな？」

許しを得た三人はワザが解けて、身体が解放された。

その後、植林先生の言う通りに医療の力を持っている異能者『癒し人』の人たちに診てもらい、傷を治すことに。京介と恵玲奈は軽い怪我で済んだので治療の時間は短かった。隣音は重い傷を負っていたので時間が掛った。全部の授業が潰れてしまった。

保健室を出て、掃除をしに運動場に戻る。

「それにしても掃除か。億劫だな」

「特に京介が使った車は爆発して部品飛び散ったから大変」

「ごめん」

戦いの惨事を見て後悔した。地面の砂は禿げて、ゴミは散らばり過ぎている。

掃除をしていると冷静になったのか、どうでもいいことで怒ってしまったことを京介から謝りだした。

「ビーフジャーキーバカにして、ごめんな。燐音もごめん。あんなことで怒ってさ」

「いや、俺のほうこそ悪かったよ。恵玲奈もすまん、ビーフジャーキーをバカにして。うまいのは知ってたんだけど、つい……な。悪かった」

「ううん、いいの。私こそビーフジャーキー如きで怒って子供だよ。ね。まだまだだった」

ケンカするほど仲が良いというのが異能者がケンカをしたら、ケンカレベルでは済まないと分かった。

「ところで、この車誰の持ち主は誰なんだ？ 俺知らないけど」

燐音が訊く。

「爆発させて悪いことしちゃった」

「誰か知らないけどごめんなさい」

京介は重たい部品を浮かせて、恵玲奈は軽い部品を持ち、元の場所に戻しに行った。燐音は風で小さいゴミを片付けた。

掃除が終わり、授業を受けることなく帰る。今日は三人の絆がより深まった一日になったようだった。

三人が家に帰宅して、家で寛いでいる頃。一人の教師が仕事を終えて家に帰ろうと車がある駐車場に向かったが、朝にはあった車がない。変わりにあったものは無残に変わり果てた部品の姿だった。

「わしが何したって言うんじゃない。まだローン残っているのに……。

誰だ！ わしの車をこんなことにしよったのわ。誰だ……」

言葉がいくにつれて涙が溢れ出し、その教師は嗚咽が止まらなかつた。

第2話 パトロール

昨日の学校までは行ったのだがケンカをしていた為、授業に参加できなかった三人は登校して最初の方はついていけていなかった。ケンカをしている間に学校では校長が来るといふ噂が広がり、今朝は全学年の生徒が騒いでいた。普段は姿を現さなく、誰も見たことがない。言わば、都市伝説的な存在でその姿を見た者は少ない。

校長が何の為に学校に来るのかは教えられていない。ただ、今日は何か言わないといけないことがあるらしく、昼休みに学校へ現れるらしい。もちろん月葉燐音のクラスでも校長の話が話題になっていた。休み時間、昼休みに校長を探そう大会を開こうと、薪山恵玲奈は提案してきた。

「校長を最初に見つけた人が優勝で、勝者はみんなから何か奢ってもらえるってことで。おっけー？」

「それなら、オッケー。問題ないよな、燐音」

夏海夜涼介の席は燐音の後ろ右斜めにあり、前にいる燐音に訊いてきた。

「まあな。でもそれなら、人数は多いほうがいい。クラスの連中を誘おうぜ」

「おっ、いいね、それ。じゃあ私が言うね」
「任せた」

恵玲奈が教壇に立ち、手で黒板を叩きつけてクラスの連中を注目させる。

「諸君！ 今日校長が来るらしいけど、知ってるよね。そこで、私が良いこと思いついたから聞いてくれたまえ。みんなで昼休みに校長探し大会をしようと思う。ただし、異能の力は使用禁止。最初に見つけた者が優勝で、商品は優勝者以外の参加者から奢ってもらえることになる。ってわけで、参加したい人は手を挙げて！」

沈黙だった空気が刹那に大歓声に変わった。続々と手が挙がる。

このクラスの連中はこういうゲームが好きだなのだ。クラスの全員が昼休みに校長探しをすることになった。

「よし、決戦は昼休みだ！ 野郎ども！！」

「うおおおおおお」

三人は心の中で闘志を燃やしていた。

俺が勝つに決まってる。

私が優勝よ。みんなに奢ってもらうんだから。

隣音には絶対に勝つ。

昼休みを待つ。興奮しすぎて、授業中に寝ている者は見事にいない。先生はいつもと違うその光景に驚いていた。また、昼休みの全時間を学園長探しゲームに費やすために、にみな、早弁をした。

そして、運命のゴングが鳴る。

「これで授業は終わります」

先生が授業の終わりの合図を口にする。

「開戦だ！ いくぞ！」

先生の合図と共に京介が開戦の合図をした。全員起ちあがって教室を勢いよく出ていく。問題の校長は、その姿を誰も知らないためにそれっぽい人に聞きまわることしかできない。だから、制服を着ていない人を探さないといけない。が、今日は何故か外部の者が多く学校にいる。何かの会議のようだ。校長が関係しているのかもしれない。

隣音は、人がいそうな中庭に向かう。そこにはすでにクラスの連中が誰かを囲んでいた。

「校長いたのか？」

「校長っぽい人がいるから声掛けたんだけど……掃除のおじいさんだった。勝ったと思ったんだけどな」

残念そうに答えて、また探しに行ってしまった。

「性別も分からないから難しいか」

ここにはいないことが分かり、別の所に行く。

その頃、二人は。

恵玲奈は女性にターゲットを絞って、校舎の中で探していた。

「絶対、女性だと思っただよね。だから、女性で探そう」

中々、それっぽい人がいない。みんな若いのだ。見た目が三十代から四十代くらいの人が多い。六十代辺りが一番いいと思っている恵玲奈は考えていた。

「これって本当に見つかるのかな……」

京介は隣音に負けたくない一心で見境なしに走っていた。何かしら、それっぽい人を見つけては声を掛けて、また走って探す。

たくさんの人と出会えるが、これには弱点があった。

「疲れた……。はあはあ」

そう、疲れるのだ。校舎の階段を走って登ったり降りたり、とても体力が消耗する。京介は立ち止り、考える。

「何かいい案は……あつ、いいこと思いついた。学校に来るんだから、校門で見張ってればいいんだ。これで勝てるじゃん」

早速、校門に向かった。

日差しがさんさんと照らされている外は暑く、暑さに弱い隣音は木陰で休んでいた。探すのを諦めたわけではない。考えながら作戦を練っていたのだ。しかし、思いつかずに時間は過ぎていた。

立ち上がり背伸びをして、探すことを再開させる。

「いくら考えても出てこないし、そろそろ再開しないとヤバいな。」

「って、あれ誰だ？ 何でこんな所に幼稚園児が学校にいるんだ」

少し離れた所に小さい子供が学校の敷地内に闖入し、歩いていた。帽子を被っていて、良く顔が見えない。

「迷い込んだのかもしれない。注意してやろう」

隣音は子供のもとに駆け寄る。

「ここは幼稚園児が来る所じゃないぞ」

「ん？ 自分に言っているのか？ なら、大丈夫だ」

近くで見るとやはり幼稚園児にしか見えない。しかし、言葉使い

は何故か偉そうだった。今時の子供は大人びていると言われている、不自然じゃないのかもしれない。

「いや、だからお前は幼稚園児だろ。ここは、関係者以外は入ったらダメなんだ。ほらほら外に出ないよ」

校門がある方向に指を差し示す。幼稚園児は不服

「お前、自分を子供だと思っているのか」

小癩な幼稚園児に燐音は億劫に答える。

「どっからどう見てもそうだよ」

「なっ、何を言っている、自分は大人の中の大人だぞ！」

幼稚園児は辛辣な態度で咆える。

「いやいやいや、どう見ても子供だろ」

呆れた笑い顔で幼稚園児の頭を撫でる。幼稚園児は小さくなりつとした目で睨めつけてきた。

「信じる。自分は、お前より年上だ！」

「信じることなんてできるわけないだろ。誰がどう見ても子供って言うぞ」

服を摘みあげ、自称大人という幼稚園児を外に出そうとする。だが、暴れてうまくいかない。馬なみに暴れる。

「やめろ！ やめろ！ 今から大切な用事があるんだ」

「俺もあるんだよ。校長探しに早く戻りたいんだ。じゃないと、勝てないだろ」

子供は暴れることを止めた。

「お前は自分のこと探してたのか」

「お前じゃねえよ。俺は、校長探してんだ」

「だから、その校長はお前が今掴んでいるだろ。つまり、自分が校長だ」

「あー、はいはい」

「いや、解ってないだろ。今、流しただろ。このガキ！」

腹を足で蹴られた。その蹴りは溝打ちにヒットする。

「痛っ」

「聞かないからだ。特別にもう一回言っただけ、お前の探している校長は自分のことだ」

自称校長はポケットに手をつ突っ込み、何かを取りだした。良く見ると、それは写真が載っている校長と記された証明書だった。先生や生徒、掃除の人まで、学校に関わりがある人は証明書を持っている。持つことが規則になっている。

それを見た燐音は驚く。

「ホントだったのか……。って、校長ってこんなにシヨタだったのか。見つけたことが奇跡だぞ」

「失礼だぞ！ これでも還暦いつてるんだからな」

シヨタ改め、シヨタ爺だ。

「いやー、すみません。子供にしか見えなくて……」

「お前、謝る気あるのか！？ で、何の用だ？」

燐音は思い出した。校長を見つけることに成功した。他の連中に知らせないといけない。

「見つけたぞー！！！！！！」

「質問に答えろよ」

聞こえるように大きな声で勝ったと他の連中に知らせる。

「え？ 今の声は燐音？ 負けたの？」

恵玲奈は女性に頭を下げて、直ぐに声のした方に駆けつけた。

京介は校門で校長を探していた。すると、遠くから声が聞こえた。その声は、校長を見つけたという声だった。

「負けたか！。校門で待ってたのに何で見つからなかったんだ」

続々と集まってくる。みんな悔しそうな顔をしていて、燐音はとても気分が良かった。

「嘘ついてんじゃないだろうな。どこに校長がいるんだ。証拠を出せよ」

クラスにいる一人が疑って訊いてきた。無理もない、こんなチビ

ツ子が爺で校長だということを普通気づかない。

「証拠ならここにあるぞ。この方が校長だ」

横にいる校長を指を差し示す。次の瞬間、周りから哄笑が広がる。燐音が嘘を冗談を言っているのだと思っっているのだ。

「お前らもか！ 自分は校長だ！」

「おいおい、冗談はよせよ。これで騙せると思ってるのか？」

「バカ、笑うな。本物だぞ、信じる。じゃないと」

「チビツ子、お母さんのおっぱい飲んで早く寝てろよ」

誰かが余計なことを口にした。燐音は恐怖を感じる。この場から逐電したいと思った。

校長はとてつもなく強いことを燐音は身に知ったのだ。みんなが駆け付ける前、笑っていたら怒ってしまい。恐ろしい人だと知ったのだ。

「バカにするのも大概にしろ！ ガキども」

「おいおい、お前だろガキは」

校長は血管が浮き出てきている、遂には手から黒い球体を出した。それを天に撃つと宙にと留まり、そして指をパチンと鳴らすと弾け、凄まじい重力がクラスの全員に押し掛かる。

「ぐわっ」

「なんだこれ……」

みんなは地面にひれ伏した。

もちろん、燐音もだ。しかも二回目だ。

「校長つつつてんだろ。これで信じたか」

「はい！」

最初、バカにしていた連中は全員大人しくなり、良い返事をした。校長は力を解き、どこかへ行ってしまった。

異能の力をくらったみんなはぐったりしている。ぐったりしているが、追い打ちをかけるように燐音は言った。

「お前ら、俺に奢れよ」

教室で授業をするはずが、何故か体育館に全校生徒が呼び出された。嫌な予感がしてならない。

「何かあるのか？」

「知らねえ。恵玲奈は知ってるか？」

「私も知らないけど……もしかして昼休みにしていたこと怒られるんじゃないの？」

「それなら、全生徒を招集しないだろ」

三人で話していたら、耳を不愉快にする甲高い音が体育館内に響く。

直後、先程失礼なことをしてしまつた校長がステージの隅から出てきた。見た目は幼稚園児なのに先生の誰よりも年寄りで偉いシヨタ爺。

後ろのほうにいる生徒は見えないだろう。

「えー、んん。あー、あー、よし。急に集まつて貰つて済まない。

今回、集まつてもらつたのは、最近、この付近で君たちと同じくらいの歳の子に声を掛けている怪しい者がいると言われている。護者の下級クラスの者が街をパトロールしている。が、君達にも実践訓練だと思つてパトロールをしてもらうことにした。なので、君たちには犯人探しをして、捕まえてもらう。捕まえた者には単位をやるから、頑張りたまえ。ただし、無理をしないように」

体育館がざわめく。あいつ誰だという声や、突然言われたことに戸惑っている声が響く。

「何か面倒なことになつたな。単位がつくのは魅力だけど」

「なに言つてんだ、隣音。俺達で平和を守るんだ」

「お前、良く恥ずかしがらずにそんなこと言えるな。俺はお前の横にいるのが恥ずかしいぞ」

治安安全のために学生で街をパトロールすることになった。

校長より全校生徒へ伝えられて、早朝と放課後に別れてパトロールすることになった。一応、危険ということで一組二人のチームでパトロールをすることに。

そのチームは担任の植林守雅先生にクジで勝手に決められ、燐音のパートナーは、いつもウサギパーカーを着ている、うさぎちゃんこと宇佐奈花になった。

初日にクラスから選ばれたのは燐音チームだった。彼女と今から街を歩いてパトロールをする。

「花ちゃん、準備できたか？」

「はい、準備出来ました。行きましょう」

なぜ、花ちゃんと呼んでいるのか。それは、彼女が宇佐奈と呼ばれるより、花と呼んでほしいと言ってきたからだ。燐音は呼び捨てにするのはまだ恥ずかしく、彼女を『ちゃん』付けて呼んでいる。

学校のクラスの教室は燐音と宇佐奈花の二人だけしかない。教室は外の光を浴びて、オレンジ色に染められている。

「今から二時間も街を歩くのか……」

「街の平和のためです。頑張らしましょう」

どこかの京介みたいなことを言う。しかし、京介とは違い、燐音は可愛いと思ってしまった。

「まあ、全校生徒でパトロールしているし、すぐに見つかるだら。なら、ちよつとの間だけ平和の為に頑張ってみるか」

「はい」

学校を去り、街に赴く。

犯人捕まえたら単位を貰えるが、別にいらないし、無理に探す必要もないと燐音は思っていた。ただ、彼女がどうかは分からないので訊いてみることにした。

「花ちゃんは、犯人捕まえたいのか？」

「もちろんです。でも、私が捕まえなくても違う人が捕まえてくれたらそれでいいです。安心して街を歩けるようになればそれで」

「そっか」

正義の味方だ。

こういうのは恥ずかしいが実は燐音も好きだった。ただ、面倒臭さがりやなだけで正義をバカにしているわけではない。

街を歩いているが、辺りに人が少ない。これでは危険に遭う可能性が高い。街を改めてみると良く分かる。

しばらく歩いてみると、燐音達とは逆の反対方向の歩道に歩いている男がいた。黒い姿をしていて、帽子を被っている。

「アイツ怪しくないか？ キョロキョロしてるし」

「そう言われればそうですね。捕まえましょう」

横断歩道を渡り、男のほうへ向かう。男は何か急いでいるようだった。

男の元へつく前にコンビニの裏路地に行ってしまった。

「急ごう」

「はい」

コンビニの裏路地まで行ったものの見失ってしまった。

「……いないか」

「まだ時間があります。探しましょう」

「そうだな、ここにいっても仕方ない。歩くか」

コンビニの裏路地に入っていた男は焦っていた。

「あいつどこ行った……はあはあ。逃げ足の速い奴め」

男もまた誰かを追いかけていた。

それは時間を遡ること数十分前。仕事でこの街をパトロールしていると怪しい男が建物の中を覗いていた所を発見した。何をしているのか事情聴取をしようと近付いて声を掛けると、怪しい男は手を振り払い逃げ出したのだ。

そして、現在に至る。

「早く見つけないと」

燐音達は歩き回ったが、あの男はまだ見つからない。この街のどこかにいるはずなのだが、さすがに見つけ出す範囲が広すぎる。

「なあ、そのウサギのパーカー着て暑くないのか？ 冬用だろ、それ。春が終わりかけの季節に入っているんだぞ。俺なんか制服だけでも、汗だらだらなのに」

宇佐奈花はずっとウサギのパーカーを着ている。学校で体育をしている時も着ていて、先生には諦められている。脱げと言われていても、言うことを聞かない。

「これは大切な服なのです。私にとって命とヘブンジンジャーの次に大事な物」

ヘブンジンジャーとは彼女が好きな炭酸飲料のことだ。

「へー、誰かの形見とかなんか？ それとも、プレゼントされたとか」

横に並んで歩いている花は驚いていた。

「そ、そのような物ではありません。これは私がたまたま買い物に出かけた時に見つけたもので、可愛いから気に入っているだけです。すいません、それと言った理由じゃなて」

責めている訳ではなかったが、責めているように聞こえたのか、謝られた。

悪いことをしてしまったと後悔した。心が申し訳なくなる。

「かわいいもんね、そのウサギ。分かるよ、俺も気に入った飯があったら、そればかり食べてしまう時があるからさ」

「ええええ、変わっています。ずっと食べるのですか？ 例えば、納豆が気に入ったら、納豆ばかり食べているのですか？」

「……う、うん。そんな感じかな。……はははは」

ただ歩いているのは暇なので彼女と会話をしていた時に、女性に声を掛けている男を発見した。校長が言っていた学校の生徒くらいな歳と聞いていたが、それより年上に見える。男はナンパをしている風にしか見えない。

どうするべきか迷う。判断を決められず、燐音は彼女に訊いてみ

た。

「どうしようか、あれ。話だけでもしてみるか？」

「いえ、捕まえましょう。私が行きます」

「え？ いきなり行っちゃうの？ 分かった、任せる」

宇佐奈花はそう言っていると走って行った。それも凡人では到底無理な速度で走っている。

異能の力を使っているためだ。

「速い。どっだけ速いんだ」

花は凄まじい速度で走って行き、あっという間に男の元に駆けつけた。彼女は、男を蹴り吹っ飛ばした。

「ちよつと、何やってんだ！ いきなりそれはさすがにダメだ」

今さら言っても意味はない。男は吹っ飛び、電柱に身体を打ち付け気絶している。燐音は走って彼女の元へ。

「捕まえましたよ。これで解決ですね」

彼女が怖くなった。

あんなに可愛い女の子なのに、恐ろしいことを言っている。

「いや、解決してない。こいつが何をしていたか分からないじゃないか」

「ちよつと！ 何してくれんのよ！！ せつかく金持ちの男をひっかけていたのに第無しにしてくれたわね。ウツキー！！」

声を掛けられていた女性は自ら男に声を掛けていた。

「……ってことは、この男は何も悪くない。花ちゃん、こいつは白だ」

「そうなのですか……残念です」

「なむなむ」

終わったことを気にせず、男に手を合わせまた探しに歩く。

「さっきの様なことは止めるようにしたほうがいい。あれじゃあ、白か黒か分からないからな」

「すみません。てっきり白かと思っていました。気をつけます」

「それがいい。でないと、死人が出る」

彼女は反省した。

思い出したかのように燐音はあのことを訊いた。

「所で、花ちゃんって何であんなに足が速いんだ？ 異能の力？」

「あ、そうです。私の力は脚力が凄まじくあるのです。下半身だけなのですが、こう見えて筋力が一般の人よりかなりあるのです。三倍くらいですかね」

「凄いな。あの男が心配になってきた」

学校からだいぶ離れてきた。時間ももうすぐ終わる頃に近付いてきた。あの男はどこに行ったのかが気になっている。時間内に見つかるといいのだが。

「あつ、見つけました。今度こそ女性が嫌がっているように見えません。燐音さんもそう見えますよね？」

「嫌がっているな」

「捕まえましょう」

気づかれないよう男に歩み寄る。制服を着ているので一般人には見せず、学校の生徒だと気づかれる可能性がある。こちら辺は異能者の学校があると有名なのだ。街の人とは共存している。

近付いてみると声がハッキリと聞こえるようになった。男は女性を誘っている。

「なあ、スケベしようや」

「嫌っ！ 止めてください。放して！」

「大丈夫、金ならあるからさ。なあ、スケベしようや」

「誰があんたみたいなきモいものとしなきゃいけないのよ。そんな軽い女じゃないわよ」

「この糞アマ調子に乗るなよ。俺が遊ぼうって言ってんだ、大人しくついてこい！」

男は女性を無理やり車に連れて行くこととする。これは立派な犯罪だ。

「花ちゃん行くんだ！ 捕まえろ」

「はい」

そう言うと、花ちゃんは男に蹴りをかました。男は車のミラーを突き抜け車内に頭から突っ込んだ。

「おい、捕まえるだけだ！」

「あつ、すみません。男が気持ち悪くて……つい」

「……まあ、いいか」

女性を解放して、血まみれの男を捕まえる。意識があつたので男を問い詰める。

「お前が女性に声を掛けている男なのか、答えろ！」

「う……うう」

「答えてください」

花ちゃんは男を揺さぶる。

「お前だな」

「あ……ああ……」

男は頷いて自分がそうだと認めた。

「これで帰れるな」

「はい、帰りましょう」

男を学校へ持ち帰り、担任に引き渡す。担任は持ち帰るなど言っていたが、引きつけてくれて警察に連絡した。

パトロールを終え、宇佐奈花とは学校で別れて、燐音は寮へ帰宅した。

「結局、あの男は違ったのか」

最初に見つけた男とは今回の犯人は違った。なら、あの男は誰なのか。

何をしていたのかは不明のままだ。

「まあいいか、捕まえたし。一日目で終わったから、もうパトロールしなくてもよくなったから」

燐音がお風呂で汗を流している時、男は追っていた者を見つけていた。

金色の髪をした男。

「こちらには気づいていないな。このままついて行こう」

その男は人目が少ないうす暗い道を歩いていた。真っ直ぐ行った奥に右に曲る道があった。追っついてい男は曲がって行った、後ろからつけている男も道を曲がる。

曲がった先に金髪の男がこちらを見て立っていた。

「やあ、男をストーカーとは良い趣味しているね。何か用かな？」

僕は君に用はないんだよね。死んどくかい？」

金色の髪の男はそう言うと、男の心臓をナイフで刺した。

「じゃあね」

「あっ……………」

第3話 少女拾う

「……………がああああああ」

一人しかいないこの部屋で暑さに耐えきれず、月葉燐音は眠りから目を覚ました。

寮にはエアコンがない。必然的に暑さに弱い燐音はこうなるのだ。「ああ、暑いせいか嫌な夢を見てしまった……。シャワーを浴びて汗を流すか」

身体を起こし、風呂場に向かう。

Tシャツとズボン脱ぎ捨て、ふと鏡に写った姿が目に入り驚く。「目が真っ赤だ。俺は泣いていたのか……」

シャワーを浴びて気持ちを切り替える。温かい透明の液体が身体を包み流れて汗を流す。落ち着つくことがでる為、朝は毎回シャワーを浴びる。

風呂場から出ると、頭と体を拭いて、パンツを履く。パンツはブリーフではなく、ボクサータイプだ。その後、水で口を濯ぐ。

部屋に戻り、テレビを点けて、燐音は腹を空かせて冷蔵庫を漁る。しかし、食べられる物があまりなかった。食べられそうなおかずは卵と魚肉ソーセージだけ。

「買わないといけないな」

魚肉ソーセージを口に放り込み、台所でフライパンの上に卵を落として、目玉焼きに料理する。

「食パンがまだ残ってたはずだよ。あつたあつた、よかった」

思い出して、食パンもゲットした。なんとか普通の朝食を食べることが出来る。

目玉焼きが完成して、テレビを観ながら朝食を頬張る。テレビから聞いたことのある名前が画面に映しだされた。

『昨夜、学園二号都市で護者の下級位の方が倒れている所を発見されました。なお、第一発見者により病院に運ばれたおかげで命は取

り留めることができた模様です。しかし、意識はまだ回復しておらず、こん睡状態。犯人の目撃者はいない模様。続いて」

「護者の下級位もパトロールしていると聞いたが……誰がそんなことを……」

朝食を食べ終わり、学校に行く準備をする。

玄関の鍵を閉め、学校へ向かう。

空を見上げると、入道雲がもくもく空を漂っていた。

「まさかラ×ユタがあるんじゃない……」

そんな気持ちになる。

京介は寝ているのか、先に学校に行っているのかは分からないが、隣の部屋のチャイムで呼んでも出てこなかった。

月葉燐音は一人で歩いていると珍しくビーフジャーキーを齧っている女と遭遇した。

「あれ見てよ、ラ×ユタだよ」

同じことを言っている。

「ごめん。同じこと数分前に言った」

「ちくしょー、遅かったか。気づいてないと思ったのに」

「悪い」

ビーフジャーキーを齧っている女は薪山恵玲奈。同じクラスメイ
トで京介と同じで懇意にしている。ロングヘアのビーフジャーキ
ーを臭わせている女の子。

「こちら、ビーフ臭くないから」

「なんて奴だ」

「燐音がそんな顔してたからだよ。て、いうか酷い。ビーフジャー
キー臭くないからね。私は可憐なお花の香りするんだよ」

嗅いでみる。

「スーハーシューハー。朝シャンの香りだな」

「変態」

「男は、みな変態さ」

恵玲奈と歩いてしばらくすると学校の建物が見えてきた。見た目はごく普通の学校だが、ここは違う。

異能者の集まりし場所。

校門を通り抜けて教室へ。

「おっはよー」

「……」

恵玲奈は元気良く教室へ入って行く。後ろから燐音はついて行く。夏海夜涼介は寝坊ではなく、すでに教室にいた。席に着き、鞆を置く。

授業の合図の音色が鳴ると担任の植林守雅先生が入室してきた。そして植林先生は、真剣な面持ちで生徒に伝える。

「昨日、声を掛けている男は捕まえた。だが、みんなも知っているとと思うが、同じくパトロールをしていた護者の者が何者かに殺された。犯人はまだ捕まっていない。この街に居るかもしれないので帰り道は気をつけるように。犯人は危険な存在だ、パトロールはしなくていい。君達にはまだ早いからな」

「はい」

燐音達がパトロールをしている時に、護者の者が殺されかけた事件が発生していた。何者かがこの街にいる。相手は躊躇もなく人を殺す者。

燐音は斜め右後ろにいる京介に声を掛ける。

「京介、気をつけるよ」

「燐音もな」

先生は要件を伝え終わると、教科書を開き授業を始めた。

放課後。

「燐音一緒に帰ろうぜ」

京介が、帰りを誘ってきた。嬉しいが、燐音には用事があった。

「悪い、帰りに買い物行かないといけないんだ。また今度な」

「分かった。じゃあ、またな」

「ああ」

冷蔵庫に食べ物が残っていない、食糧を買いに行かないと隣音は食事無しで過ごさなくてはならない。

京介と別れて街に出かける。事件があつたが、街は何も変わらないう風景だった。スーパーマーケットで野菜や肉、米、飲み物などを買っていく。

「レジの一部にすごい並んでるな」

レジをしているバイトを見ると美人の女性がいた。並んでいるのはおっさんだけだった。他のレジは女性しか並んでいない。空いているレジを選ばずに隣音はおっさんの後ろに並んだ。

「ここに並ぶに決まってる」

それほど時間に急いでいないので美人のレジを選んだ。お釣りを渡される時に手が少し触れる瞬間がたまらない。ドキドキ感を味わえる。

レジを済まして家に帰ろうと店を出る。

夕日の光で街は輝いていた。人が続々と駅から出てくる、仕事が早く終わる人だ。

買い物袋を提げて歩いていると、左から突然何かが飛び出してきて衝突した。

「うわ!」

「きゃ!」

甲高い声の悲鳴がした、正体は女の子だった。

衝撃で買い物袋を落としてしまう。

「俺の生卵がああああ」

女の子に問い詰めようとしたが、女の子はすでに隣音から離れよとしていた。

その子は隣音と同じ黒髪で髪がボサボサだった。

全体を見渡すと髪だけじゃなく、服も何もかもボロボロだった。

「って、待て。なに逃げようとしてんだ」

手を伸ばし、女の子の手を捕まえ逃がさないようにする。

「ごめんなさい、ごめんなさい。紗希、急いでて……じゃあ」

「急いでたのか。引きとめて済まなかったな……じゃあな　って、おい！　逃がさないからな！」

紗希と名乗る少女は逃げようとしたが、力を込めて掴み逃がさない。

「捕まっちゃう……離して、お願い」

女の子を良く見ると擦り傷や顔が汚れていた。ぶつかった時かもしれないが、それだけの傷ではない。切り傷が何ヶ所もあった。

「何があつたんだ？」

「紗希は追いかけてるの」

「……なら、俺の家に来い。服も破けてるし、傷の消毒もしなきゃいけない」

「……………」

ギュウルギュルと音が鳴る、紗希の腹の虫が飯を要求したのだ。

「別に何も悪いことなんてしない。ご飯ごちそうしてやる」

「え、良いの！？　行く！」

「よし、了解した」

帰り道にぶつかった少女をそのまま家に連れていくことにした。

数十分後　。

月葉燐音と女の子が去った後、二人がいた所に一人の男が佇んでいた。

「あゝあ、また逃げちゃった。どこ行つたんだろ？　また探さなきゃいけないのか」

その男は金色の髪でどこか子供のよ様な風貌で中性的な男だった。

「これは拉致じゃないけど……誰かに見られたら困るな。気をつけないと」

何故追われているのかを訊くのは後にすることにした。家に帰って早くご飯が食べたいと燐音の腹の虫もうるさかった。

紗希という少女にも親がいるはずでその存在が気になった。知らない男と歩いていることを知らないのは良くないと思い、電話を掛けるように言った。

「お前の親が心配するから電話しとけ。携帯貸してやるから携帯を紗希に渡す。しかし、少女は受け取らない。」

「いらぬ。紗希、独りだけだから」

「独り？ 親は居ないのか？ じゃあ親戚に掛ける」

「紗希は独りぼっち……」

「帰る場所とかはないのか？ どこに住んでるんだ？」

「分からない」

少女は目を下に伏せる。

これ以上は訊かない、詳しくは寮に帰ってから訊くことにした。

話しているうちに寮についた。寮といってもマンションと呼べるくらい大きさを誇っている。灰色の落ち着いた感じの壁で、街と溶け込んでいる。

「ここが俺の住んでる所だ。さあ、飯を食うぞ」

「うん」

「ああ、でもその前にお前はお風呂入れ。汚れてるからな、体を綺麗にしろ」

玄関の鍵を開けて中に入る。買い物袋を机に置いて台所には行かず、先に風呂場へ向かった。いつもはシャワーだが、紗希のために湯を湯船に入れる。湯は直ぐに溜まり紗希を風呂に入れる。その間に、燐音は料理を作ることにした。何を料理するかは決まっていた。どの選択肢を選んでも全て卵という文字が書かれている。

風呂から上がった紗希が声を掛けてきた、燐音はTシャツとズボンと男洋パンツを用意して持っていく。ドアをノックして手だけを

入れて服を渡した。着替え終えた紗希がリビングにやってきた。

紗希は髪を濡らしたままだった。

「髪乾かせよ」

「大丈夫だよ」

「ダメだ」

文句を言っている紗希を洗面台に連れていき、タオルで濡れている髪を拭いて、櫛で梳かしながらドライヤーで乾かす。

卵焼き、卵のお吸い物、野菜と卵炒めと作ったものをテーブルに並べる。

「よし、食べよう」

「やったー」

テーブルに座る。

独りだけじゃないのは懐かしいな。何年振りだろうか……。

燐音は昔を思い出していた。素敵な日々、輝いていた日々、取り戻せない日々を。

「頂きます」

「いただきます」

二人は、命に感謝する。

よつぽどお腹が空いていたのか、紗希はモリモリ食べている。頬ぺたがリスのように膨らむ。おいしいといいながら笑顔で食べる。自然と燐音も笑顔になる。いつも独りで食事をしている燐音にとっては独りじゃないことが楽しいのだ。

燐音は思い出したかのように訊いた。

「そっいえば紗希の苗字訊いてなかったな。苗字は何て言うんだ？」

「うーん………忘れた」

紗希は何も語らない。いや語れない。

これ以上踏み込んでもいいものか考えた。だが、燐音は尋ねておきたいことがあって訊くことにした。

「親いないんだよな。こんなこと訊くのは良くないと思うが、どうしていないんだ？」

「分かんない、前の人は『捨てた』って」

驚いて卵焼きが口からでる。

「捨てられたのか！？ その前の人っていうのは今どこに？」

「分かんない」

「……そうか。紗希は、どこにも帰る場所はないんだっけか？」

「うん」

紗希は無邪気に飯を食べながら答えている。

どこにも帰る場所がないのなら家に置いておくことは悪いことではない。それに、何より面影が似ていた。燐音のことが大好きだった人に、燐音も大好きだった人に。

放っておけなかった。

「ならここに居ろ。俺は独り暮らしだし、心配しなくていい」

「ここに居ていいの？」

妹として家に置くことにした。

「今日から紗希は、月葉紗希だ」

「月葉紗希？」

ぼかんとした顔で燐音を見る。意味が分からなかったようだ。

「俺の苗字だ。妹にしてやる」

「ほんと？」

「ホントだ」

帰る場所がない紗希は、燐音の家で暮らすことになった。

第4話 京介VS恵玲奈

紗希は布団に包まってベッドでまだ寝ている。寝像が悪いらしく昨日寝ていた逆の方向に頭があつた。床で寝ていた燐音は布団から出て、大事に閉まっておいた箱を開けて、ピアスを取り出した。左耳につける。

忘れようとしていた、忘れてはいけない、思いを取り戻した。

朝日の光を浴びて、星がぶら下がり輝いている。

いつも通りにテレビをつけてニユースを観る。情報は大切だ、知っておいて損はない。と言っても、毎日暗いニユースを観るだけ。黒焦げの死体がここ数週間で頻繁に発見されている。通常者か異能者か知らないが、許せない行為だ。

ニユースを観終わって、朝食を作る。今日から一人分ではない、紗希の分も作らなくてはいけない。

朝食を作っていると煩かったのか紗希が眠りから覚めた。ベッドから降りると燐音の所に歩み寄ってきた。

「おはよう。良く寝れたか？」

「うーん、ぐっすり寝れた」

「俺は学校があるから家に居れないけど、紗希は家にいる。街は物騒だからな」

「分かった」

「よし、もうすぐ出来るから待つてろ」

料理を作り終わって並べる、食パンとソーセージがテーブルを飾る。

朝食を食べ終わり、燐音は学校に行く準備をして、紗希はテレビで朝のアニメを観る。学校に行つてくると伝えて燐音は学校に向かった。

今日は基礎戦闘訓練がある日だ。異能の力を使うわけではない、本来の力で殴り合い、蹴り合いをして身体で戦う。基本的パロメー

ターを底上げするために生徒同士が戦い合う。勝利した者は成績に+1が貰える。ちなみに卒業した時に成績が優秀だと護者になる為の試験に有利だ。試験に有利だと良い結果が出て、本部に所属しやすくなり、ナンバーズになれる一番の近道になる。

「まあ、俺にはどうでもいいが……」

教室はピリピリしていた。

担任の植林守雅先生が教室に入ってくるとより一層空気が痛くなつた。みんなのやる気が伝わってくる。

「今日は基礎訓練の日だ。飯は抜いてきたか？ もし忘れて、食ってきたやつは吐かないように気をつける、吐いたら自分で処理させるからな。ちなみに先生、今日の朝食は納豆に味噌汁、魚だ。まあ、どうでもいいが……。そんじゃ、待ってるから早く来いよ」

燐音は朝食を食べないほうがいいことを忘れていた。

「やべ、普通に朝食摂つたよ。吐かなければいいんだけど、吐きそうな予感がする」

女子は更衣室に行き、男子は教室で戦闘服に着替える。この服は丈夫な糸で作られており、簡単には破れないようになってる。

「つよ、燐音。まさか朝食食べたのか？」

京介が背中を叩いて顔色が悪い燐音に声を掛けてきた。

「あ、ああ。忘れてた」

「マジか……。溝打ちとか喰らつたら掃除フラグだぞ。まあ、俺も食つたから人のこと言えないけどな」

「食つたのかよ」

お互いの目を見て、言葉を交わさずとも伝わったかのように頷き、二人は覚悟を決めた。速攻でケリをつける。

校庭に集まると植林先生は対戦相手を決めていく。次々に発表されていき、燐音の番がやってきた。

「月葉燐音は宇佐奈花と対決な」

女性と男性は別けられない。実戦は相手がいつも男性とは限らないため、女性でも手加減せずに戦えるような訓練も兼ねている。

宇佐奈花は、戦闘服にウサギのパーカーを重ね着していた。パートルの時に彼女と一緒にだったが、蹴りには自身があるようだった。簡単には勝てないと燐音は気を引き締める。

「よろしく願います、燐音さん」

「ああ、よろしく花ちゃん。君の蹴りは怖いね」

「大丈夫です。あれは異能の力を使っていたので今回はアレほどではありません」

「それは良かった」

全員発表が終わり、最初の5組が遠ざかってスタンバイする。燐音は次の組みで、京介は最初の組みの中にいて、恵玲奈と戦うようだった。

「勝敗はギブアップした方が負け、気絶した方が負け、吐いた方が負け。時間内に決まらなかつたらドローだ。始め！」

甲高い笛の音が鳴る。

開始の合図が鳴ると京介から駆け出した。恵玲奈は逆にその場に止まって迎え撃つ。

右の拳がストレートに恵玲奈の顔に向かう。

「もらつたあ、最速最勝！」

しかし、その拳は顔に当らずに空を貫いた。恵玲奈は首を横に傾けて避けた、直後、京介の頭を掴むようにして押し倒す。京介は頭を地面に強打した。

「いつてええええ、頭割れるう。くそー」

地面をゴロゴロ転がりながら、喘いでいる。

「っふ、ごめんごめん。痛かった？ ギブアップしたら痛い思いしなくて終われるよ」

恵玲奈は京介を見下ろして笑顔で告げる。

京介は立ち上がって指をさす。

「負けねえよ。ぶっ潰す、覚えてろ」

「それ負けるセリフだよ」

「うるせえ、うるせえ。まだまだ始まったばかり、戦いはこつからだ！」

「打ち切り漫画のようなセリフ吐いて、るよ！」

恵玲奈の拳は顔を狙う。それを左手で受け止めて、京介は顔を殴りにかかる。

「スキだらけだ」

「そうはいかないよ」

京介の攻撃も受け止められて、お互い互角。

このまま力押しを続けるのかと思いきや、京介は右脚で恵玲奈の脇腹を蹴った。恵玲奈は脇腹を押さえる。

「くははは、どうだ。やる時はやる男なんだよ。+1は俺がもらうんだ」

「まだ腹に蹴りいれたただだよ……。そんなんじゃギブアップなんてしないんだからね」

恵玲奈は下段に蹴って相手のバランスを崩し、京介の溝打ちを狙って蹴りあげた。二回目の蹴りは手で防がれ、ダメージは減少された。

空中に飛ばされた京介はくると身体を回転させて着地する。地面に足がついた瞬間に恵玲奈に駆け出して右から拳を突き出す。恵玲奈は右手に意識がいき、左手を見逃した。

「きやつ」

京介の左拳が恵玲奈の顔を殴る。

「右とみせかけて左でした。残念」

恵玲奈の身体がプルプル震えだした。

「ギブアップしたほうがいいよ。これ以上痛い思いをしなくて済むからなー」

「……」

恵玲奈は恵玲奈ではなかった。顔を殴られ緒が切れていた。

右裏拳で京介の顔面を狙う。それに反応できた京介はしゃがんで

第5話 燐音VS花（前書き）

ゲロです。

第5話 燐音VS花

横にいる宇佐奈花に月島燐音は心配して訊いた。

「次は俺達だな。ウサギのパーカー脱いだほうがいいんじゃないの？」

「いえ、心配いりません。汚れませんから」

「それって、俺の攻撃が当たらないみたいじゃないか」

「そうですね、させませんから。汚れる前に私の蹴りでギブアップしてもらいます」

砂を握って投げてやろうかと思った。だが、こんなことで汚しても虚しいだけだ。

花ちゃんには地面にひれ伏してもらおう。

交代の笛が鳴り、燐音たちは先程戦っていた京介達がいた所と入れ替わる。京介は恵玲奈に半殺しされたせいで医療班に診てもらっている為、医療室へ、恵玲奈も付き添いの為にいない。

「緊張するね」

「覚悟してください、痛いですから」

「痛いのは嫌いんだけどな」

「ギブアップすると痛い思いしなくてもいいですよ、燐音さん。私は本気ですから」

「俺も本気だそうかな。勝つためならどんな手を使ってでも、勝っちゃうかも」

「では、始めましょう」

二回目の音は試合を合図する笛、それが花の言葉の数秒後に鳴らされた。

基礎訓練の試合をする者達が雄叫びをあげながら、駆け出したり、掴みあったりしている。燐音達も然り、始まった。花は、姿勢をいつもよりも低くして疾風のごとく燐音襲いかかる。その勢いを殺さずに足を浮かせて、回転を加えて上から足を降り下ろしてきた。

燐音は片腕でその蹴りを受け止める。

「つく、重い」

腕で防いだ刹那に燐音は左手で降り下ろされた足の首を持ち、前に投げる。

「やりますね、燐音さん。初撃をガードされるとはなかなか」

「甘くみてもらっちゃ困る。これでもちゃんとその学校に所属している身だからさ、命を守らなくちゃいけない為に鍛えているんだよね」

「ご立派です。……ではこれでどうですか」

花は同じように真っ直ぐ走って向かってくる。ジャンプをして同じ攻撃をしてくるのだと燐音は警戒して構えたが、回転を掛けずにもも攻撃は仕掛けてこず、頭上を飛び越えて後ろから蹴りを喰らわせようとしてきた。燐音は身体の向きを変えて、背中に攻撃をくらうことは回避した。その替わり腹に花の蹴りが炸裂した。

「後ろに引いて衝撃を和らげましたか。これで終わりじゃありませんよ」

蹴りをくらった燐音は地面に倒れた。花は暇を与えることなく、かかと落としをしようとしている。

「わあああ、ちょっと待って」

燐音は両手を振っている。

「戦いで待ったはないですよ。気絶してください」

「そんなことしたら気絶じゃなくて吐いちゃうよ。俺、朝は食べてきたんだ。ゲロかけちゃうかもよ」

「そんな脅しいりません」

燐音は横に転がりながら避けていく。

花は追いかけて、サッカーボールを蹴るように燐音の脇腹を蹴った。

「つくほう！ さっきまで……かかと落としだったのに……」

脇腹を押えて、悶絶している。

攻撃をくらっているだけではない。蹴ってくる足を掴みとり上に

引くと、花は足場をなくして上半身を地面に叩きつけられた。燐音は両足を持ってジャイアントスイングの体勢に入った。花は抵抗して支えを燐音の手に任せて、身体を浮かせて回転させた。

「おいおい、また回転かよ。よく回るね」

形勢を元に戻した。二人は立つたまま動かない。両者は注視して相手の動きを窺っている。

「これで終わりにしましょう。疲れてきました、一発でも入ったらギブアップするってことでもいいですか？」

「もちろん、それに賛成。もうやばいんだよ……いろいろと。身体痛いし」

他の戦っている組みの誰かが気合いを入れた掛け声が合図になり、二人は同時に駆け出した、と思っていたが、燐音は途中でスピードが鈍くなり遂には止まってしまった。口元を抑えて苦しそうにしている。朝に食べた物が胃から逆流していた。

「諦めましたか、私の勝ちです」

「むうんん」

宇佐奈花は突っ込んで行き、拳で殴ろうと右手を出した。

手で口元を押さえたまま避ける。燐音は涙目で花を凝視していた。「うおえろええええ」

手で押さえていたが、決壊して中身が飛び出してきた。勢いがついたゲロは飛散して花の顔やパーカーに付着した。

「まさか本当にゲロを吐くとは……。今まで戦った終着がゲロですか……いや、そんなことは別にいいのです。でもこっちは、これはどうしてくれますか？」

人差し指でパーカーに付いている嘔吐物を示している。

「あ、あの、あれ……。アレとかどうです」

恐怖が押し寄せて言葉にならなかつた。

「私、提案があるのですがいいですか？」

「え、ええっと……どんな？」

「死んで詫びてください」

ニツコリ笑顔が視界に入り、刹那に暗転した。

目が覚めると、いつもお世話になっていた所だった。

「生きてた……俺、生きてたよ。よかった、まだ死にたくなかったんだ」

医療室の中で月葉燐音は喜んだ。周りには誰もいない。壁に掛っている時計を見ると時間は学校が終わる頃だった。ベッドを降りて教室に向かう。

扉を開ける。教室では担任の植林守雅先生がホームルームを行っていた。

「月葉、起きたか。お前は自分で吐いたゲロの掃除に行け、今なら夏海夜も掃除しているはずだ。あと、宇佐奈に謝っておけよ」

「は、はい。すみませんでした」

ジャパニーズ必殺技の、土・下・座をする。顔を上げて見たら、笑顔だった。

「私もすいませんでした。パーカーが汚れて暴走してしまつて異能の力使つて蹴っちゃいました」

「だから、あの刹那的な早さで視界が真っ暗になったのか」

燐音は納得して、その後には恐怖を感じた。下手したら死んでいたと思うと身体が急に寒くなった。

運動場に向かうと、寂しく掃除をしている京介の姿があった。

「ゲロ兄弟だな」

「ライト兄弟みたいにな」

第6話 服を買う

総合商業施設の中で燐音は苦戦していた。女性物の服と下着を買う予定でいたのだが、実際に行ってみると女性しかいなくて入りづらいいもほどがあつたのだ。

燐音は行ったり来たりしてウロウロしている。

「くそ、こんなことまで考えてなかった。……でも買わないといけないよな」

「すみません、お客様。ちょっとこちらに来て頂いてもいいですか？」

警備員の中肉男が燐音に声を掛けてきた。

「いや、その、違うんです。怪しい者ではありません。あの、失礼します」

「自ら怪しい者ですとは言いませんからね。ちょっとだけ質問に答えて頂くだけです、こちらです」

腕をがちり捕まれ逃げようにも逃げられない。困った燐音は一か八かに出た。

「あつ、あそこで万引きしている人いますよ！ 店の人が気づいていません。警備さんが捕まえなきゃ。仕事してきてください。俺はここで待ってますので、店の利益を守ってきてください」

「ん、君はここで待っているんだぞ」

「はい」

警備さんは燐音の嘘に騙されて万引きをしていない人を捕まえに行った。

「何かを得るには何かを犠牲にしなければならんだ。ごめんね、お客さん」

燐音は違うフロアに走って逃げた。三階の女性服を売っている所の前で足を止める。燐音では行けないので携帯電話で薪山恵玲奈を呼んだ。約三十分待っていると恵玲奈が来てくれた。

「最初から私を連れてくればよかったのに」

「いや、うん、そうなんだよね。俺もそう思った」

「で。何で隣音が女性用の服とか下着がいるの？」

隣音は恵玲奈に言われて今気づいた。何故買うのか、その理由を訊かれることを忘れていた。少し歪曲して話した。

「偽妹のために服と下着を買わなきゃならなくなったんだ。実家の方から来てんだよ、今。あいつ服を持ってくるのを忘れてたらしんだ。だから、着る服がなくてさ」

「それで服を買いたいんだ。てか、妹いたんだね。知らなかった」

「うん。言っていないからね」

「思ったんだけどさ、私の服はあげようか？ 下着は買わないといけないけど」

「え、マジで。助かる」

恵玲奈に身長を伝えると大体こんなもんだと言つと下着を買つてくれた。助かる。服は恵玲奈から貰うことになったので、家に向かう。寮からは歩きで十分掛る所にある。

「待ってて」

そう言つて、恵玲奈は家の中に取りに行つた。

「お金浮いた。持つべきはお金の次に友だな」

数分後に、白いフリルが装飾されたワンピースを手持ってやって来た。大きさからするとびつたり物だ。

「これでいいよね？ はい、どうぞ」

「ありがとう。偽妹も喜ぶよ」

隣音は笑顔でお礼を言つた。

恵玲奈と別れて、寮に戻る。鍵を出してドアを開ける。紗希は寝ていた。起こさないように近づいて夕飯を作るためにキッチンへ。料理を作っていると紗希が起きてきた。

「おかえりー」

「ただいま。今日は紗希にプレゼントがあるぞ。あれを見る、お前の服と下着だ」

「やったー、着ていい？」

「いいぞ」

女性用の服に着替えた紗希が天使だった。

第6話 服を買う(後書き)

別けなくてもよかったですんですが、別けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9164x/>

英雄ストーリー

2011年11月2日03時11分発行